

保健医療学部長 × 学生対談 保健医療学部長に聞く 学部が輩出する将来の医療職とは



保健医療学部 学部長
教授 片寄 正樹
Katayose Masaki

理学療法学科 第4学年
小菅 凛
Kosuge Rin
道愛女子高等学校出身



卒業論文を進めていくなかで大変なことは少なからずありますが、同期も一緒に頑張っていることや、先輩方や先生の助言がとても励みになっています。

【島田】卒業論文の作成は自分の興味を深めることのできる大事な機会だと思います。また担当して下さる先生からの丁寧な指導で、じっくりと楽しみながら研究することができています。実際に社会の役に立つような研究になれば良いと考えています。

【学部長】みなさん卒業論文を作成するプロセスを楽しまれたようですね。日常の臨床の中で想起した疑問を科学的に解決していく研究は、保健医療職にとって不可欠の素養です。卒業論文を書くために様々な文献を読んだと思いますが、これらのプロセスで研究を実施するのみならず研究成果を解釈し日常の臨床で活用することも学んだと思います。本学での卒論の経験を基盤に、研究をすることそして研究成果を活用するスキルを高めてほしいと思っています。

私たちが目指すこれからの地域医療

【学部長】みなさんの目指すこれからの地域医療のありかたはどのようなものでしょうか。

【小菅】これまでの講義や実習から、スポーツ分野や高齢者の健康づくりなど幅広い分野について学んできました。それらの専門的な知識を総合させて、健康レベルや目的に応じて効果的なりハビリテーションを提供できる理学療法士になりたいと思います。

【稲田】新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続いていること、そして現在日本が超少子高齢社会であることから、感染予防や認知症予防などの言葉をよく耳にするように、疾患を抱える方だけではなく元気な地域住民の方々の健康を「予防」の観点からも支えることが大切であると考えています。

【島田】私も住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けられることが理想だと思います。そのために個人の考えや生活全体を捉える作業療法の視点をいかした、地域に根ざした介護予防をやりたいと考えています。

【学部長】どうして介護予防に興味を持ったのですか？

【島田】講義を受けていても、自分の中のイメージでも、医療職は病院勤務をしているイメージが強いですが、ただ、病院ではなく普段の生活の中で役に立つ仕事がしたいと思い、介護予防に携わりたいと思いました。講義で保健センターや市役所で勤務している卒業生がいると聞いたので、将来は病院以外で勤務することも視野に入れています。

【学部長】素晴らしい視点です。保健医療の知識と技術を様々な社会課題の解決に応用していくことは、今後ますます求められてくると思います。できることなら、グローバルな視点ももちながら保健医療の多様性のある可能性を追求してほしいと思います。

保健医療学部
保健医療学部長 × 学生対談

作業療法学科 第4学年
島田 清貴
Shimada Kiyotaka
室蘭栄高等学校出身



【学部長】みなさんが札幌医科大学で学生生活を過ごす中で、どんなところに本学の良さを感じていますか。

【島田】作業療法学科は1学年の人数が20人と少なく、友人との距離感が近いところが自分の性格にも合っているなど感じています。

【稲田】看護学科は1学年50人いますが、実習の際は色々な人とペアを組んで患者さんを受け持つため、お互いの価値観や考え方を共有し、自分自身の世界観を広げることができると感じています。また、部活動に所属することで、同じ学科の学生だけでなく、保健医療学部他学科の学生や医学部の学生と交流する機会を得ることができました。

【学部長】保健医療学部そして医学部あわせても1学年200名です。他学部、他学科との交流もおおいに楽しめる規模ですね。将来につながる友情も育まれますね。

本学で学んだこと

【学部長】本学での学生同士の交流の話を伺ったところで、みなさんは本学でどんなことを学び、どんな成長ができたと思いますか。

【稲田】私は「根拠」を追求することの大切さを学びました。看護師に限

らずすべての医療職において共通していますが、医療職としての責任を自覚し、患者さんに対するケアの場面で挙げて、ケアを計画する段階から「なぜこのケアが必要なのか」、実践の場面でも「なぜこの方法でよいのか」など、すべての行動が根拠に基づいている必要があることを学びました。大学では根拠を追求するための思考やそれに必要な知識を、講義や演習、そして実習によって獲得することができました。これらの学びによって分からないことを放置せずに先生方や実習先の指導者さんに聞いたり、自分で不足している学習を行ったりするなど、知識を増やすことに積極的になることができたと考えています。

【学部長】素晴らしい。医療者にとって様々な知識や技術がアップデートされることは不可欠ですが、説明できる根拠を備えていくことが大切なのです。こういった考え方を習得してもらえたことを嬉しく思います。

【小菅】私は推測する力が特に身についたと思っています。患者さんの全体像を把握することが臨床において重要であることをこれまでに何度も耳にしてきました。2、3年生では病院実習ができませんでしたが、学内演習とオンラインでの実習を通して限られた情報から患者さんの生活や障害について様々な可能性を推測し、それについて検討する力が身に着いてきていると感じています。



看護学科 第4学年
稲田 悠乃
Inada Yuno
札幌北高等学校出身

【学部長】コロナ禍でみなさんの2年、3年の臨床実習が思うように展開できませんでした。学部教員全員で連携しながら臨床スキルを向上させるためのオンライン環境下での演習や実習も準備してきたところです。評価をいだけで率直に嬉しいと思います。

【島田】専門科目についてよく学べたのはもちろんですが、学科が少人数なため、協力し合いながら勉強していくことが多くありました。そこで友人と目標に向かって努力することを経験できました。これはこれから先にも役に立つ経験だと思っています。

【学部長】少人数であることで、友人とのコミュニケーションも深くなりますね。目標を共有できることの素晴らしさを感じることができたのは本当によかった。協力により課題を克服していく経験がこれからのチーム医療を担うための大きな糧となってくれることを期待しています。

研究の意義

【学部長】みなさんは卒業論文についてどう思いますか。

【稲田】自分が医療や生活などの様々な分野のなかで疑問に思うことを、研究を通して答えを導き出すことができ、大きな達成感を得ることができる機会であるとともにこれまでの学びの集大成にもなるのではないかと思います。卒業論文では自分がその著者となって1つの論文を作成していくため、果たして自分ができるのだろうかという不安もあるがそれ以上に楽しみな気持ちが大きいです。

【小菅】「生じた疑問に対して、自分の納得のいくまで突き詰めて考える」という過程において、楽しさ苦しさ達成感などさまざまなことを経験できる貴重な体験だと思います。研究分野についての知識が増えるのはもちろんですが、ある先生がおっしゃっていた「ものごとを突き詰めていくと分野を問わず広い範囲の知識も自然と増えていく」とことを実感し始め、より研究に楽しさを感じています。